

## 令和2(2020)年度事業評価について

(2020年4月から2021年3月)

1. 令和2(2020)年度の外部評価員による事業評価は、次の通りであった。

(1) 外部評価員 5名

伊藤 制子氏	東邦音楽大学講師・音楽学
稲村 太郎 氏	公益財団法人セゾン文化財団 プログラムオフィサー
恵良 隆二 氏	公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 専務理事
桂 真菜 氏	舞踊・演劇評論家、 早稲田大学演劇博物館招聘研究員
佐藤 良子氏	一般財団法人地域創造 芸術環境部 主事

※肩書は令和3(2021)年3月時点のもの

(2) 評価方法

- 主催事業を外部評価員が実地見学を実施し、事業評価シート(個票)に個別事業の評価を記述。
- 年度を通した総合的な評価として、個別事業評価等を参考に事業評価シート(総合)に評価を記述。その書面評価に加えて、外部評価員と職員とが出席する「事業評価会議」を開催し、意見交換や議論の上、当該年度の事業評価を総括。
- 令和2(2020)年度は、4月から7月まで新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により主催事業をすべて中止したため、外部評価員による評価は8月より実施した。

(3) 評価結果(概略)

- 個別事業評価数(カッコ内は、平成31/令和元(2019)年度)

県民ホール	6事業 9シート (7事業 18シート)
芸術劇場	11事業 28シート (10事業 19シート)
音楽堂	4事業 6シート (8事業 12シート)
計(延べ)	21事業 43シート (25事業 49シート)

○事業評価シート（総合）

提出 5名提出

○事業評価会議

令和3(2021)年9月10日（金）

出席評価員 5名出席

出席財団職員 副理事長、専務理事、事務局長、県民ホール館長兼芸術劇場館長、音楽堂館長、音楽事業部長、芸術劇場事業部長、担当職員、事務局

※なお当年度の事業評価会議は、新型コロナウイルス感染症予防対策として、財団理事、事務局及び一部の外部評価員をのぞき原則としてオンライン参加とした。

(4) 評価結果（概要）

1. 芸術文化事業

(1) 3館合同プロジェクト

個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"><li>・「芸術監督プロジェクト」では、両芸術監督の高い芸術性と美学に裏付けられた自由な発想で、様々なジャンルを横断的に取り上げ、次の時代を切り拓いていく芸術のあり方を提示する。 （※新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年度の実施は中止とした。）</li><li>・「オープンシアター」では、横浜都心臨海部が1年の中で最も賑わう「横浜開港祭」の時期に合わせて、同地域に点在する3館を面的にとらえ、施設を街へと開く事業展開で県民に向けた芸術文化の普及啓発や多彩な芸術との出会いを提示するとともに、外国人や障がい者等への鑑賞支援を推進する。 （※新型コロナウイルス感染症の影響により、中止または日程や内容を変更して実施した。）</li><li>・令和2年は一柳慧氏の神奈川芸術文化財団芸術総監督就任（平成12年4月）から、20年を経過することから、記念プロジェクトを3館合同で開催する。</li></ul>
<p>○3館合同プロジェクトは、プログラム全体として3館一体で実施する成果や効果が見えにくい部分があるという懸念もあったが、5年間継続して取り組んだことにより、ジャンルの垣根を超えた発想や意識が、各館事業の中にも定着したのではないかと考えられる。</p> <p>○オープンシアターは、新型コロナウイルスの影響により中止あるいは内容変更を迫られたが、WEB配信などWEBを活用して劇場を開く取組みを各館が独自に行ったことは評価できる。</p> <p>○一柳慧氏の神奈川芸術文化財団芸術総監督就任記念プロジェクトである『Toshi 伝説』は、合同企画として大変優れていた。先進的な内容にもかかわらず、多く聴衆を集めており、特に若い世代に訴求する内容であったことは高く評価できる。</p> <p>○芸術監督プロジェクトの中止は重い決断であったが、今後の実現が期待される。</p>	

(2) 芸術文化事業

<p>県民ホール文化事業</p>	<p>個別の目標や施策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際的な水準を満たす多彩で良質な芸術文化を創造するとともに、県民により多くの鑑賞機会を提供する。</li> <li>・芸術総監督のディレクションによる新しい表現の追求と意欲的な芸術文化を創造発信する。</li> </ul>
	<p>○オペラ「トゥーランドット」は、演出、歌唱面などのバランスのとれた企画であり、コロナ禍で公演を実現させたことは高く評価できる。共同制作のノウハウをいかしながら、これまで制作した公演のレパトリー化にも取り組むとよいのではないかと。</p> <p>○基幹公演としてオペラに継続して取り組み、毎年新しいことにチャレンジしながらニーズや反応を模索している中で、今後オペラをどのように捉えていくのか、長期的に考えていく必要があると思われる。</p> <p>○ギャラリー企画展「大山エンリコイサム展」は、内容は素晴らしかったが来場者が少なかったことがもったいない。ホール来場者に訴求するような取り組みや、多くの鑑賞者へ訴求するPRなど、集客力向上の工夫が必要である。</p> <p>○結果として令和2年度は中止となったが、県域への巡回公演に継続的に取り組んでいることは、県の文化施設として高く評価できる。</p> <p>○人材育成事業については、特に音楽大学と連携して公演を行ったことは、アートマネジメント人材育成の観点で高く評価できる。一方で、人材育成事業の数が多くなっているため、事業が主体的役割なのか、支援的役割なのか、立ち位置を少し整理する必要があるのではないかと。</p>	
<p>芸術劇場</p>	<p>個別の目標や施策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・舞台芸術の新たな表現の可能性を探る試みを発信し、芸術文化の発展に貢献する。</li> <li>・舞台芸術の未来を担う創造者や担い手と協働し、芸術文化に関わる人材の発掘、育成を図る。</li> <li>・令和3年1月に開館10周年を迎えることを記念し（開館は平成23年1月）、令和2年9月以降のプログラムを「開館10周年記念」として広報宣伝活動を進めていく。</li> </ul>
	<p>○白井晃芸術監督の最終年度であったが、5年間の芸術監督の集大成として、これまでに取り上げた新進から中堅の演出家、振付家を起用し、実験的な作品から幅広い観客層に訴求する作品まで、創造性の高い公演がラインナップされたことが高く評価できる。</p> <p>○コロナ禍において本公演の中止や延期を余儀なくされた公演についても、映像配信等の試みにより演劇の創造性を広げたことは高く評価できる。今後はこういったマネジメントやノウハウから派生したコンテンツも収入源のひとつとして捉えていくと、財団の経営基盤強化にも繋がる可能性があるのではないかと。</p> <p>○「メトロポリス伴奏付き上映会」は、音楽と映像を組み合わせ、ジャンルの垣根を超えた企画であったと評価できる。今後も他館と連携して、演劇ファンだけではなく、音楽ファンにも来場してもらえるような企画が増えるとよい。</p> <p>○子どもを対象とした演劇プログラムは、夏休みの期間に留まらず、年間を通して行われることが望ましい。</p>	

音楽堂	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開館 65 周年、改修工事後のリニューアルオープンを機に、音楽堂の優れた資産として強く発信した「文化遺産的建築」「木のホールの優れた音響」「戦後音楽史を作った音楽ホールの伝統」という個性を継続して発信し、「室内オペラ・プロジェクト」の継続展開などで、新しい音楽堂のイメージ形成を強化する。</li> </ul>
		<p>○音楽堂室内オペラ「リナルド」は、直前まで歌手陣に変更があったにも関わらず、それを乗り越え実現させたことは高く評価できる。音楽堂の室内オペラは、オペラ界でも非常に高い評価を受けており、今後も継続的な取り組みを期待したい。</p> <p>○「ヴィルトゥオーゾ・シリーズ」「アフタヌーン・コンサート」を含め、国内外で活躍するアーティストを取り上げる事業は、コロナ禍の出入国制限に大きな影響を受けた。その中で、様々な方法に変更しながら多くの事業を実施したことは高く評価できる。コロナ禍が収束するまでは、オンラインの手法等も駆使しながら、音楽堂の核となる事業の継続に努めてほしい。</p> <p>○県の重要文化財指定への動きがあるようだが、建築的価値を打ち出した建築ツアーの充実や、紅葉ヶ丘のエリアブランド形成を踏まえ、県立図書館や横浜能楽堂をはじめとした周辺施設との連携等、更なる取り組みが今後も望まれる。</p> <p>○映像配信の試みを多様な方法で実施し、特に夏休みオーケストラ企画はよく構成されており、視聴者数も多く、アウトリーチの新たな方法を開拓した点は高く評価できる。</p>

## 2. 施設維持管理運営事業

県民ホール	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・快適な会場環境の創出のための適切な施設の維持管理</li> <li>・県民自らが様々な文化活動を行うための快適な場・サービスを提供する。</li> <li>・施設のバリアフリー、ユニバーサルデザインの採用等、県民サービスの観点から時代に即した施設整備を行っていく。</li> <li>・県民のニーズに応える貸館事業</li> <li>・国内外からの来場者の増加に対応すべく、催し物情報の提供や館広報の充実を図っていく。</li> </ul>
		<p>○専門家の意見も踏まえ「ガイドライン」を作成するなどの取組みは評価できる。今後はホールで作成したガイドラインに関するノウハウを一般利用の団体と共有することや、一般利用減少に関する対策の検討が望まれる。</p> <p>○施設の老朽化に関しては、利用者に不安を抱かせないように、日々の点検による安全性確保とホール機能維持に努めるとともに、県との連携にも一層力を入れてほしい。</p> <p>○バリアフリーについては、ハードとソフトの両面において、今後もサービス水準の向上への継続的な取り組みが重要である。</p> <p>○「劇場運営マネジメントプロフェッショナル人材養成講座」が自館の職員を講師として行われたことは、専門性の高い施設の強みであり、こうしたスキルを持った職員の育成・活用が行われていることは高く評価できる。</p>
芸術劇場	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内外の舞台芸術公演を楽しむための快適な会場環境を創出するとともに、劇場の高度な舞台設備や専門人材を活用した創造活動がスムーズに行われるよう、適切な施設の維持管理及び運営を行っていく。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人・障がい者等の来館者対応として、鑑賞サポートの充実、ホームページの改修、職員研修などを順次計画的にハードとソフトの両面から進めていく。</li> <li>・ホール特定貸館として劇団四季の公演を実施する。</li> </ul>
		<p>○ホールや大スタジオの利用率が大きく減少することなく、業界内でも参考となるガイドラインを作成する等、コロナ禍においても適切な施設の運営、事業の継続が行われたことは評価できる。感染対策として、子どもの感染対策（ワークショップ等）が、今後の課題となるのではないかと。</p> <p>○アトリウムを含めた施設空間全体の可能性を広げる取り組みは評価できる。</p> <p>○閉館中も様々な企画により観客の気持ちをつなぎとめる工夫がなされており、KAATから舞台芸術ファンに向けてメッセージを発信し続けたことは高く評価できる。</p> <p>○車椅子で来場した方の導線には改善の余地が認められる。またコロナ禍において、関係者やスタッフには、さらなる接客意識の向上が求められる。</p>
音楽堂	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽専用コンサートホールとして相応しい良好な保守管理、利用者サービスの向上に取り組む。</li> <li>・経年劣化に対する県有財産の価値保全および現在の施設設備の性能水準を保持するための適切な管理に取り組む。</li> <li>・障がい者、高齢者および外国人のための情報提供やバリアフリー対策に取り組む。</li> <li>・ボランティアグループと連携した定期的な建築見学ツアーの実施に引き続き取り組む。</li> <li>・紅葉ヶ丘地区の活性化のため、図書館、青少年センター、横浜能楽堂、横浜市民ギャラリーとの5館連携事業「まいらん」を実施する。</li> </ul>
		<p>○感染症専門医の協力も得て、綿密な実証実験が行いながらガイドラインを作成したことは安心・安全な施設運営への取り組みであると評価できる。これらのノウハウを、県内他館とも共有できるような機会があるとよいのではないかと。</p> <p>○県民ホール同様、コロナ禍における一般利用減少に関する対策検討が望まれる。</p> <p>○「前川建築見学ツアーin 音楽堂」は、ボランティアグループとの連携により、満足度の高いコンテンツであったと評価できる。今後も引き続き歴史性を前向きに捉えた運営が期待される。</p> <p>○紅葉ヶ丘5館連携事業「まいらん」は、エリアの連携により長期的な積み上げ効果が期待できる。関係先との連携を継続し、ネットワークの強化に努めてほしい。</p> <p>○コロナ禍においては、人の滞留を防ぐための導線づくりや、開場時間の検討、関係者スタッフのさらなる接客意識の向上が求められる。</p>

### 3. 本部事業、その他事業

芸術文化に関する情報収集	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報誌「神奈川芸術プレス」を年6回発行し、芸術文化に関する情報を発信し、幅広い県民が芸術文化に親しみを感じられるよう内容を充実する。</li> <li>・最新号からバックナンバーまでのWeb版「神奈川芸術プレス」を公開し、SNSと連動してインターネット上でも広く情報発信する。</li> </ul>
--------------	----------	---

	<p>○年度末にホームページがリニューアルされ、全体的に見やすくなったことは評価できる。</p> <p>○各館の SNS については、以前より積極的に発信しているように感じられる。さらに積極的な発信が望まれる。</p> <p>○神奈川芸術プレスのリニューアルにあたっては、今後も紙媒体とウェブ媒体との相乗効果を意識してほしい。特に紙媒体については、資源と経費の面から有意義な活用方法の検討が望まれる。</p>
チケットかながわメンバーズの運営	<p>個別の目標や施策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・チケットかながわの安定した運営及び団体販売等の促進</li> <li>・インターネット予約システムが安定稼働するよう整備維持するとともに、新機能を積極的に導入し、利用者の一層の利便性向上を図る。</li> <li>・ウェブサイトの多言語化に取組み、インバウンド対応を推進する。</li> </ul> <p>○かながわメンバーズの運営は、サービス享受状況や、訴求力の観測が必要ではないか。</p>
資金調達活動	<p>個別の目標や施策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資金調達活動として、文化庁等からの補助金・助成金の確保に積極的に努める。</li> <li>・賛助会員制度（寄付金）の新規会員獲得のため、法人、個人の方々に向け方策を実施する。</li> <li>・インターネットを活用した寄付の受け入れを推進し拡大を図る。</li> <li>・個別協賛金や、広告出稿等の幅広い支援を働きかける</li> </ul> <p>○国の補助金では、文化庁の劇場・音楽堂等機能強化推進事業の「劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業」及び「地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業」に採択されるなど、国内のトップレベルの劇場・音楽堂、そして地域の中核的役割を担う音楽堂として高く評価できる。</p> <p>○クラウドファンディングについては、コロナ禍において個人の社会貢献への意識が高まっている状況を踏まえ、動向や変化に鑑みた資金調達活動の検討が望まれる。</p>

全体	<p>○配信関係の評価指標としては、視聴者数だけでなく、「平均再生時間」や「新規チャンネル登録数」等の指標についても集計することも有効である。</p> <p>○財団全体の効率性・有効性・ブランドを高める観点から、様々なデータを経営指標として、総合的に取り組む姿勢が重要と考えられる。</p> <p>○地域の文化施設をリードする立場の財団として、ネットワークの拡張やノウハウの提供により、県内における存在感が一層高まることを期待したい。</p>
----	---

#### 4. 令和2(2020)年度重点テーマ「5年間の総括(指定管理のまとめ)」について

第3期指定管理における運営方針が5年間の中で達成されたかを各館ごとに内部総括し、それを踏まえた上で、外部評価員から今後に向けての講評(助言、アドバイス)を得た。

- 5年間の中で、コロナ禍や施設の老朽化など様々なことが起きているが、職員の素晴らしい企画力で、どの館も芸術的水準の高いものが提供できていた。  
今後については、基本的な意識を改革して、この神奈川の中で財団がどういう存在であるべきかを皆で共有し、次に進んでほしい。
- 全体的にバランス良い取り組みが行われ、各館が独自の事業展開をしていた。特に事業評価活動において、各分野と各施設の問題意識からくる各年の重点テーマを体現する事業が、着実に実施されたということは非常に大きく、コロナ禍の影響についても、これまでの積み上げや知見、ネットワークが動き、乗り越えられた部分があるのではないかと考えられる。  
最終年の重点テーマにはオリンピックが含まれていたが、オリンピックのような外部要因は不確定要素が強く評価が難しいため、特にコロナ禍においては、不確定要素に対する「プランB」「プランC」といったシナリオも考えながら事業を進めていけると良いのではないかと。
- 5年間の目標と具体的なアクションを定め、着実に取り組みを進めていた。具体的に評価できることとしては、県域全域に展開するコンテンツを作ってきたこと、芸術監督プロジェクトによるブランドへの貢献があげられる。  
今後に向けて、一つ目はオープンシアターのような劇場を地域に開く取り組みについて、開くから深める、繋げるといった段階に進化していくことで、様々な人との繋がりの可能性も見えてくるので、その辺りをチャレンジのポイントとしてほしい。  
二つ目は、評価の分母を広げ、多様な方々に訴求する取り組み、ネット上で生じる繋がり等も含めて指標化すると、評価の方法がより広がり、様々な企画にも役立つのではないかと。  
三つ目は、情報収集と支援者作りで、様々なICTや技術の進化と並走する中で、利用者、支援者、街からの情報発信や提案を捉え、それらを吸い上げていくと、結果的にサービス向上や可能性の拡大に繋がるのではないかと。
- 3館一体の指定管理のもとで展開した取り組みが、攻める劇場というイメージを作ったと感じている。後ろ向きにならず、前人未踏の境地に切り込むような勢いのある企画、オープンシアターのようにファミリー層を受け止める企画、攻めることと受け止めることができる3館が成立した点は、5年間の成果であったと思われる。  
今後もジャンルの垣根を払ったパフォーマンスが増えていくと、名状し難い芸術の流れを神奈川から生んでいける。また横浜赤レンガ倉庫での演劇パフォーマンス、象の鼻テラスでのイベントなど、劇場以外の空間の活用が目を見てきたが、その実験を積極的に伝えていくと、さらにたくさんの方が恩恵を受け、良い文化状況が広がっていくのではないかと。
- これまで新しい企画が生まれ、県域の巡回事業など、自館にとどまらないコンテンツも生まれ、様々な試みがなされてきたことを評価したい。  
今後、事業数、集客数、利用率といった定量的指標に留まらず、財団のノウハウやネットワークといった、培われてきた定性的な部分をどう評価するかについて考えていく必要があるのではないかと。  
また、県内の公立のホールと色々な形で情報交流できる仕組みを作り、神奈川の中で財団の存在感を示していくことも大事なのではないかと。3館が培ってきたもの、しっかりと核になるものを堅持して、今後の戦略に活かしてほしい。